京都市「架け橋期のカリキュラム」例の解説

参考:新潟県幼児教育センター「架け橋期のカリキュラム作成の視点」

共通の視点		5歳児	小学校1年生	文科省の手引
①目指す子ども像		視点:「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにし、就学前施設の園目標や小学校の教育目標、地域の願いなどから、架け橋期を通してどのような子どもを育てるか、育てたい子ども像を検討・決定する。		P.24、25
時　　期		4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月　1月　2月　3月	4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月　1月　2月　3月	
②発達の具体的な姿とその流れ		「安心」「自立」「成長」など、望ましい発達の具体的な姿を示す。		
		視点:「目指す子ども像」の育成に向けて、子どもの姿や発達を踏まえ、遊びや学びのプロセスを深め、学びの連続性を確保するための工夫を示す。(「目指す子ども像」の育成に向けた架け橋期における主体的・対話的で深い学びをどのように実現するか。)		P.26 P.36～38
		・園における遊びを通して、幼児がどのような学び(体験)をし、深めているか具体を示す。(遊びの中での「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」)	・小学校での各教科などにおける授業がどのように展開し、児童の学びを深めているか具体を示す。(教科の3観点に関わる具体的な姿)	
③園で展開される活動／小学校の生活科を中心とした各教科などの単元構想など		視点:「目指す子ども像」の育成に向けて、園の活動と小学校の各教科等の教育内容や活動のつながり・在り方を示す。(各施設における活動や小学校の教科の単元構想の在り方)		P.27、28 P.39～42
		・小学校での学習や生活を見通した遊びや活動、園生活の具体・工夫を示す。(小学校教育の前倒しではなく、充実した主体的な遊びにある学びの実現)	・幼児期の体験や園での遊びや生活、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導の具体を示す。スタートカリキュラム等による指導の工夫。	
④指導上の配慮事項	保育者・教師の関わり	視　　点: 遊びや学びのプロセスを深めるための先生の関わり、環境の構成や環境づくりとしてどのような工夫があるか。 関 わ り: 安心と自立を支える教師との信頼関係を基盤に子ども同士の考えをつなぎ、子どもと共に創造する、多様な子ども一人一人の可能性や活躍の場を引き出す集団づくりに向けて先生の関わりや役割を示す。 環境構成: 園での遊びや生活、小学校での学習や生活は「もの・人・こととの関わり」という直接的・具体的な対象との関わりの中で行われるという共通性の理解とともに、子どもが学びを深めていくことができる環境の在り方について示す。		P.29 P.43～46
	環境構成・環境づくり	・「③園での活動」における5歳児との保育者の関わり方や環境構成・環境づくりの具体・工夫を示す。	・「③ 単元構想」における1年生と教職員との関わり方の具体・工夫を示す。 ・安心して活動できる環境や主体的に学びに向かう環境の具体・工夫を示す。	
⑤子どもの交流		視点:互恵性のある交流を通した学びを深めるため、各園・小学校の年間の活動に、子ども同士の交流などをどのように位置づけるか。 年間計画に子ども同士の交流を位置づけ、交流する対象の年齢・学年・交流時期・交流のねらいなどを共通理解する。		P.30
		・1年生(他学年)との交流場面のねらいと具体を示す。(事前・事後の打合せなども記載)	・5歳児との交流場面のねらいと具体を示す。(事前・事後の打合せなども記載)	
⑥教職員の交流		・園と小学校の先生同士の交流 (架け橋ミーティング、合同研修会、公開保育・公開授業) を年間計画に位置付け、子どもの育ちを共有する。		
⑦家庭・地域との連携		視点:「目指す子ども像」について家庭や地域と共有し、どのように連携・協働していくのか、その具体を示す。		P.30

京都市架け橋期のカリキュラム例「共通の視点」について

・小学校ブロックの架け橋ミーティングにおいて「目指す子ども像」をはじめとする共通の視点 (表の①～⑦の項目) について協議します。その視点を基に各校園の取組について協議・検証・改善することが大切です。
・共通の視点は、各ブロックの架け橋ミーティングにて地域や子どもたちの実態によって決めるものです。ただし、「①目指す子ども像」は、幼保小の連携・接続を進める上で要となる視点であり、全ブロックで共通する項目であると考えています。
・②～⑦の視点は、「①目指す子ども像」の具現化に向けて、「②発達の具体的な姿」や「③具体的な活動・教科の取組」など、架け橋ミーティングにおいて子どもの姿を通した協議が進められる項目を例として挙げています。

架け橋期のカリキュラムは「取組の足跡」

・「架け橋期のカリキュラム」は各ブロックで「目指す子ども像」について協議し、それに向けての話し合いや取組を充実させてきた足跡です。毎年、カリキュラム通りにするためのものではなく、子どもや学校園の実態に合わせて、継続できるよう改善していきましょう。

各園における具体的な保育実践（活動）は、それぞれのカリキュラムに基づいて実践するものです。
この、京都市「架け橋期のカリキュラム」例は、小学校区を中心とした地域の幼保小接続を実現する上で考えられる一例であり、
各ブロックで作成される際に、あるいは、作成までの間の参考例として示すものです。

京都市「架け橋期のカリキュラム」例（5歳児）

○○小学校ブロック（○○園）

共通の視点		
① 目指す子ども像		安心感を基盤に、主体的に夢中に遊び（学び）、友達と関わりながら、自己発揮する子ども（小学校1年生と共通）
時　　期		4　5　6　7　8　9　10　11　12　1　2　3
② 発達の具体的な姿とその流れ		これまでの経験を生かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考えたり、試したりして実現しようとしていく時期 【安心（信頼関係・仲間の中での自信）】【成長（心が動く主体的な遊びや友達と共通のめあてをもって遊ぶ中での体験）】【自立（成長の自覚と1年生になる喜び）】 安心・安定した生活（信頼できる先生の存在・基本的な生活習慣や技能）　⇒興味・関心に基付き心が動く「もの・人・こと」との出会いの中での主体的な遊び ⇒仲間と共に繰り返し試行錯誤する中での気付き、発見、面白さの追求、挑戦、探究心、自己主張・折り合いなどの様々な心の体験 ⇒友達と共通のめあてをもつ遊びや園生活での役割の継続性⇒自らの成長への自信と自立、1年生になる喜び
③ 園で展開される活動 ＊5歳児:幼児教育の基本を踏まえた遊びを中心とした総合的指導の中で行う ＊「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見取りつつ、1年間を通して、発達にふさわしい活動をコーディネートする		進級 誕生会（毎月）　保育参観 水遊び（プール）　園外保育・散歩（通年） 運動会 楽しい集い　作品展 生活発表会 卒園 **通年で行う活動**（例）砂や水で遊ぶ/色水・石鹸・粘土などの感触遊び/絵の具で遊ぶ/リレーやおにごっこ/ドングリや落ち葉で遊ぶ/ごっこ遊びや表現遊びなど ○興味・関心に基づく主体的な遊び 個人の挑戦・仲間との遊び・クラスのみんなで遊ぶなど形態を変えて人と関わりながら夢中になる遊び（P.60） ○体を動かすことへの興味や意欲につながる遊び 竹馬や縄跳びなど自らの挑戦、かけっこや団体競技など競い合う運動遊び、リズム遊びや表現遊びなど（P.56） ○季節ごとの自然に触れ、栽培活動や生き物を育てる遊び、生活 生き物との暮らしや遊び・飼育・栽培・収穫パーティー・当番活動・園外保育など（P.57） ○身近な地域とつながり、遊びや生活に必要な情報を取り入れたり、伝え合ったりする遊び 地域の人、もの、施設などとつながる体験、伝統文化体験など（P.58） ○身近な事象に関わり、試行錯誤する中で新しい考えを生み出す喜びを味わう遊び 様々な遊びの中での自分事の遊び、友達と考えを出し合って、思考を広げ深める遊びなど（P.59） ○数量や図形などへの興味や関心につながる遊びや生活 様々な積み木を使った構成遊び、箱や廃材を使った遊び、カード遊び、数量を意識した片付けなど（P.70） ○多様な体験の中で様々な物、行動、感情を言葉に表すなど、言葉を豊かにする遊び クラスでの遊びの振り返り、絵本の読み聞かせ、生活発表会に向けての遊びなど（P.61） ○音楽や絵画、製作活動の中で、感性を働かせ、ありのままの表現を楽しみ、喜びを味わう遊び 素材との出会いや様々な表現、作品展や卒園に向けての活動など（P.58）
④ 指導上の配慮事項	保育者の関わり	・年長児になった喜びに共感しつつ、一人一人の思いを受け止め、信頼関係を築き、安心して主体的、意欲的に遊べるように遊びの環境を構成していく。 ・常に保育者の役割（幼児の理解者、共同作業者、共鳴する者、憧れのモデル、遊びや課題解決の援助者）を意識しながら保育を展開する。 ・個々のめあてに挑戦する、友達と共通のめあてをもち遊ぶ、年長者としての役割を果たそうとするなどの5歳児の発達にふさわしい遊びや活動を支える。 ・修了する自覚をもち、1年生になる期待を膨らませ、新しい生活に意欲的に向かえるように、幼児の気持ちを支え、自信につなげるようにする。
	環境構成・環境づくり	・自分の思いの実現や遊びの発展に配慮し、自ら、又は他者とつくる世界を楽しめる環境をつくる。（複数の幼児が一緒に遊べる広い場所・体の動きの調整が必要な遊具） ・幼児にとっての学びである遊びは、環境との関わりが深まることで充実するため、幼児が関わる環境（人、もの、出来事、時間、空間）のすべてが幼児にとっての教材となる。幼児の主体的な遊びを大切にしつつ、幼児の成長への願いや意図を環境に込めるようにする。
⑤ 子どもの交流		参考例）　「すなやつちとなかよし」（P.80、81）　「水遊び」　「運動会の交流」「あきみつけ」（P.82～85）　生活科「もうすぐみんな2年生」（1年生体験）（P.86～89）
⑥ 教職員の交流		参観・連絡会　公開保育・授業　合同研修会　子どもの交流の事前・事後研修　入学児の連絡会
⑦ 家庭・地域との連携		・5歳児の発達の姿や子どもの成長を伝え、保護者の支援をするとともに、幼保小連携・接続の意義を保護者や地域に発信する。 ・入学に向けて、生活習慣の見直しや、子どもの成長をともに確認したりして、子どもとともに保護者の不安を軽減できるような働きかけをする。

①
立場を越えた大人同士で子どもが何に興味、関心をもち、育っているのかなど、地域の実態に添って、具体的に語り合うことで、子どもへの願いを共有して生み出すもの。

②
5歳児の発達の姿を見据え、発達にふさわしい主体的な遊びのプロセスを大切に子どもや地域の実態に添って考える。

③
各校ブロックで話し合った「共通の視点」「目指す子ども像」に基づき、具体的な活動例については、各園で重点を定め、活動例を精選するなど、柔軟な対応を。また、活動の時期は、子どもの興味・関心と保育者の意図により一定ではないので、年間を通した書き方にしている。
ただし、3要領・指針に基づく「幼児教育の基本」や幼保小接続のキーワードとなる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して、活動内容を検討すること。

④
保育者の関わりや環境構成のポイントを一般的に重要な視点で示している。各ブロックの子どもの実態に合わせて、重視すべき点を話し合い、より具体的に示すこと。

⑤
交流は、取り組みやすい活動ではあるが、幼保小互いの教育の負担になりすぎないように年間計画を立てること。

⑥
教職員の交流は、互いの教育を理解し合う上で、非常に有効な手立てである。特に幼児期の発達や遊びの中の学び、活動や環境に盛り込まれた保育者の意図や願い、環境設定や保育者の見取りなど、子どもの育ちに重要なことが保育には含まれている。小学校の先生にその重要性が伝わるように、保育を公開するなどして相互理解を進めること。

⑦小学校入学に伴い、教育のシステムが変わることへの保護者の不安は少なからず大きい。保護者の悩みや不安に寄り添い、架け橋プログラムの実践が保護者の不安軽減につながるよう幼保小連携・接続の意義や実践内容を保護者、地域に発信すること。

京都市「架け橋期のカリキュラム」例は、小学校区を中心とした地域の幼保小接続を実現する上で考えられる一例であり、
異校種間のカリキュラムをイメージし、各ブロックで作成される際や、作成までの間のヒントとなるよう参考例として示すものです。
就学前施設における具体的な保育実践（活動）は各園のカリキュラムに基づいて実践するものであることを踏まえ、1年生のカリキュラムを工夫しましょう。

京都市「架け橋期のカリキュラム」例（1年生）

○○小学校ブロック

共通の視点		
① 目指す子ども像		安心感を基盤に、主体的に夢中に遊び（学び）、友達と関わりながら、自己発揮する子ども（幼保5歳児と共通）
時　　期		4　5　6　7　8　9　10　11　12　1　2　3
② 発達の具体的な姿とその流れ		自分の好きなことや得意なことがわかってくる中で、それ以降の学びや生活へと発展していく力を身に付ける時期 【安心（先生や友達への信頼感）】　【成長（主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業の中で）】　【自立（成長の自覚と2年生への期待）】 安心・安定した生活（新しい環境の中で信頼できる先生や友達と出会い、主体的に自己発揮し、学校に慣れ見通しをもつ。） ⇒学ぶことについての意識があり、各教科の学習内容について授業を通して学び、様々な活動を楽しむ（自覚的な学びの芽生え） ⇒学習活動を通して他者と関わりながら、自分の課題解決に向けて意欲的に学んでいく（自覚的な学びへの意欲） ⇒成長の自覚と自立（これまでの成長の確認とこれからの成長への期待）
③ 小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構想等 ＊1年生:幼児期の経験を踏まえた活動は、児童の安心も学びの深まりも実現できることを意識して授業を展開すること。経験してきた子どもと共に楽しい授業を創りましょう。		＊「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児の発達や学びの様子を理解した上で、カリキュラムをデザインする。 ＊架け橋期の発達の特性を踏まえ、スタートカリキュラムの充実（生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫や弾力的な時間割の工夫）を図る。 ＊就学前施設と話し合って授業づくりをする等、就学前施設での子どもの育ちと学びを生かし、より充実した授業になるようにする。 【幼児期の遊びや経験した活動を共有した単元例】＊基本的には、幼児期の遊びや生活で育まれた資質・能力は、すべての教科の素地になっている。 国語科「おはなしききたいよ」「なんていおうかな」等（P.66） 算数科「わくわくすたあと」「いろいろなかたち」等（P.67、71） 音楽科「うたっておどってなかよくなろう」「がっきとなかよくなろう」等多数（P.68） 図画工作科「ちょきちょき～」「すなやつちと～」「カラフルいろみず」等多数（P.77） 体育科「かけっこリレーあそび」「ゆうぐであそぼう」等「～あそび」等多数（P.73） 生活科:「いちねんせいがはじまるよ」「あきとともだち」「もうすぐみんな2年生」等全ての単元　特別の教科　道徳：幼児期の育ちが全ての教材の素地
④ 指導上の配慮事項	教師の関わり	・安心を生み、成長、自立を支える人的な環境として、教師は、児童と一緒に活動を楽しみ、児童の様子を温かく見守り、児童の目線で話を聞くようにする。 ・一人一人の子どもの内面の理解に努めながら、自己肯定感を高め、よさや可能性を引き出す個に応じた適切な声かけや支援を行う。 ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図る。（資質・能力の育成を目指す、単元などのまとまりを見通し計画を立てる、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、より質の高い学びを目指す、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図る。）
	環境構成・環境づくり	・入学当初は、幼児期の生活の流れを知り、遊びの環境をつくるなどして、児童が安心して学校生活に慣れ、活動できる環境づくりをする。（P.63、64） ・児童が主体的に学びに向かえるよう、活動に応じて、教室の空間づくりに工夫をするなど、十分に活動し、自己発揮できるように環境を設定する。 ・園における環境（教材）の工夫などについて、小学校でも適宜取り入れ、ICTも有効に活用しながら、架け橋期の教育の充実を図っていく。
⑤ 子どもの交流		参考例）　「すなやつちとなかよし」（P.80、81）「なつとともだち」　「運動会の交流」「あきみつけ」（P.82～85）　生活科「もうすぐみんな2年生」（P.86～89）
⑥ 教職員の交流		参観・連絡会　公開保育・授業　合同研修会　子どもの交流の事前・事後研修　入学児の連絡会
⑦ 家庭・地域との連携		・半日入学など入学前から、子どもや保護者の不安が軽減できるような取組を工夫する。（P.62） ・幼保小連携・接続の意義を保護者や地域に発信する。

①
立場を越えた大人同士で子どもが何に興味、関心をもち、育っているのかなど、地域の実態に添って、具体的に語り合うことで、子どもへの願いを共有して生み出すもの。

②
5歳児の発達の姿を見据え、1年生の発達にふさわしい主体的な学び、自覚的な学びへのプロセスを大切に子どもや地域の実態に添って考える。

③
前段は架け橋期のカリキュラムを考える上での重要な考え方を示し、後段は1年生の教科書から幼児期の遊びや活動とつながりの深い具体的な単元を挙げた。幼児教育の遊びや生活で体験した素地が各教科に組み込まれている。このことは、発達の似通った「架け橋期」を一体的に捉える意義を表していることを踏まえ、幼児期の体験、活動の手法が1年生での「主体的・対話的で深い学び」につながることを意識して各教科の単元を構想する。

④
教師の関わりや環境づくりのポイントを一般的に重要な視点で示している。各ブロックの子どもの実態に合わせて、重視すべき点を話し合い、より具体的に示すこと。

⑤
交流は、取り組みやすい活動ではあるが、幼保小互いの教育の負担になりすぎないように年間計画を立てること。

⑥
教職員の交流は、互いの教育を理解し合う上で、非常に有効な手立てである。特に幼児期の発達や遊びの中の学び、活動や環境に盛り込まれた保育者の意図や願い、環境設定や保育者の見取りなど、子どもの育ちに重要なことが保育には含まれている。また、小学校で「主体的・対話的で深い学び」を目指していることをブロック内の幼保にも伝え、共に保育や授業の改善に生かすこと。

⑦小学校入学に伴い、教育のシステムが変わることへの保護者の不安は少なからず大きい。幼保小の架け橋プログラムの実践が保護者の不安軽減につながるよう、幼保小連携・接続の意義や実践内容を保護者、地域に発信すること。